

さわだスポーツクラブ創業50周年記念誌



TO THE NEXT FEATURE

未来への軸 — 100年の子どもの未来づくり

さわだスポーツクラブでは、こどもの脳と運動の関連に着目し、バランスの良い発達を促すように設計されたABCプログラムという独自理論に基づいた幼児体育指導法を行っています。特殊な器具を使わず、シンプルでどなたでも再現しやすい内容が特徴です。



SAWADA S.C.



YEARS

さわだスポーツクラブ創業50周年記念誌



目次

- 01 ▶ 代表あいさつ
- 02 ▶ さわだスポーツクラブの歴史
- 03 ▶ これからのさわだスポーツクラブ

MESSAGE

時代が変わっても、子どもたちにとって大切なことは変わらない。創業理念を胸に、未来へ。



さわだスポーツクラブ 創設者
澤田幸男・まり 夫妻

代表あいさつ

1975年4月、「さわだスポーツクラブ」という看板を掲げ、世田谷区梅ヶ丘の下宿屋(やまべさん宅)の六畳一間からスタートしました。固定電話が一本あるだけで、資金も何もない、不安いっぱいの船出でした。しかし、大好きなアウトドアと四季折々のスポーツを通じて、子どもたちに「体験の場」と「機会」を提供したい——そんな想いを胸に活動を続け、気づけば50年を迎えようとしています。

私がなぜこの仕事を始め、会社を立ち上げたのか？それを語るには、私自身の人生を振り返らなければなりません。すべてを語り尽くすことはできませんが、少しだけお話しさせてください。私の父も母も教員をしていました。父は溪流釣りの名人で、イワナ・ヤマメ、そして夏のアユ釣りを得意としました。また、茶摘みから蒸し、手揉みで仕上げるお茶作り、さらには花・野菜・米作りにも長けた名人でもありました。

そんな環境の中、四季折々の自然の中での体験が、幼少期の私にとっての遊び道具となりました。この原体験こそが、私がこの仕事を始める根幹となったのです。時代が変わっても、子どもたちにとって本当に大切なことは変わりません。だからこそ、これからも「さわだスポーツクラブ」は、創業当初の理念を大切にしながら、未来へと歩んでいます。



手探りのスタートから50年。まり夫人が遺した温かな足跡とともに、これからも未来へ歩み続けます。

幼児体育の専門性

「運動と脳」をつなぐ独自のプログラムさわだスポーツクラブは、単なる運動指導にとどまらず、幼児期の発達に必要な「運動と脳のつながり」に着目したプログラムを開発しています。科学的アプローチ：理論と研究に基づいた運動プログラムを提供「ABCプログラム実践テキスト」：幼児期の運動指導の理論と実践を体系化伝承遊びの活用：鬼ごっこや手遊びなど、自然な動きの中で神経系の発達を促すこれらの取り組みを通じて、「できる」ことを目標にするのではなく、「運動って楽しい!」と感じられる環境をつくっています。

社員のWell-being

楽しめる職場が、最高の教育を生む子どもたちにスポーツの楽しさを伝えるためには、指導する社員自身が心から楽しめる環境が必要です。さわだスポーツクラブでは、社員の働きがいを高めるために、以下のような取り組みを行っています。パパ育休の推進：業界に先駆けて育休取得をサポートワークライフバランス：家族と過ごす休暇制度を導入し、年1回の長期休暇を推奨柔軟なキャリアプラン：社員の成長を支える多様なキャリアステップ社員が充実した生活を送ることが、より良い指導につながると考えています。

社会貢献

スポーツは人生を学ぶ場スポーツは、単なる運動ではなく、ルールを守ること、仲間と協力すること、挑戦することを学ぶ場です。私たちは、地域社会と連携し、子どもたちに「運動する楽しさ」を伝える場を提供しています。地域での運動イベント開催：すべての子どもたちがスポーツを楽しめる場をつくる幼児体育の魅力：スポーツインストラクターの仕事の魅力を広め、業界の発展を目指す東京ヴェルディとの協力：スポーツの力で社会貢献活動を推進遊びを通して学んだことは、人生のあらゆる場面で役に立つ——この想いを、これからも大切にしていきます。

国際交流

スポーツを通じたつながりを世界へ2002年の日韓ワールドカップを機にスタートした韓国とのスポーツ交流会。MERSやコロナ禍の影響で一時的に中断していましたが、2024年から再開予定です。NPO法人アジアキッズスポーツ協会の活動：東アジアの子どもたちとの交流を推進スポーツを通じた国際理解：言葉を超えたコミュニケーションを体験未来への展望：韓国だけでなく、さらに多くの国との交流を視野に入れるスポーツは世界共通の言語です。国を超え、子どもたちがつながる機会を広げていきます。

さわだスポーツクラブが目指す未来の幼児体育は、より多様で、個々のニーズに合わせたものへと進化していきます。バーチャル技術やAIを活用した運動指導マンツーマンの体育家庭教師サービスの拡充動画を活用した分かりやすい指導法の確立スポーツの枠を超え、さまざまな方法で「運動の楽しさ」を届ける新しい挑戦を続けていきます。読者の皆様へ——共に歩む未来へ50年間、さわだスポーツクラブを支えてくださった皆様に、心から感謝申し上げます。時代が変わっても、子どもたちにとって「運動の楽しさ」は変わりません。これからも、子どもたちが笑顔でスポーツを楽しめる環境をつくり続けていきます。

「次の10年も、ともに歩んでいきましょう!」

未来への取りくみ

「企業魂」放送動画はQRコードからご覧いただけます▶



01 ▶ テレビ放送
東京MX「企業魂」
きぼうたましい

02 ▶ 社会貢献活動
東京ヴェルディクラブ
3×3バスケット
スポンサー契約



有限会社 さわだスポーツクラブ

〒177-0042
東京都練馬区下石神井4-28-13塩谷ビル1F
[TEL]03-3995-0298

「幼児体育の専門家として、唯一無二の道を切り拓く」

START

1975年4月
「さわだスポーツクラブ」設立



▲ 創設者・会長 澤田幸男・まり夫妻

固定電話一本、下宿屋の六畳一間からのスタート。創設者・澤田氏が掲げたのは「都会の子どもたちに、自然の中で遊び、学ぶ機会を届けたい」という強い思いだった。その理念の原点となったのが、1964年東京オリンピック体操選手・小野喬・清子夫妻との出会い。幼稚園での運動遊びを学び、社会体育の重要性を実感する。当時、練馬区の幼稚園には男性職員がほとんどおらず、スポーツ指導のニーズがあることを確信。子どもたちの体験の場を広げ、活動を始めた。



SAWADA S.C.

1982年
日本幼少児健康教育学会の設立

「子どもの運動には、理論的な裏付けが必要だ。」そう考えた澤田氏は、大学の先生たちとともに日本幼少児健康教育学会を設立。幼児体育の専門性を高めるための研究が始まった。同年、フジテレビの人気番組「ひらけ!ポンキッキ」とのコラボ企画として、西武球場で「アスレバル東京」を開催。全国から多くの子どもたちが集まり、スポーツの楽しさを体験する一大イベントとなった。

1982年頃
サッカークラブ連絡協議会を設立

財団法人日本スポーツクラブ協会内に「サッカークラブ連絡協議会」を立ち上げ、全国の同業者を集める動きを本格化。これにより、幼児体育の枠を超えたスポーツ指導のネットワークが形成され、競技スポーツと基礎運動の架け橋となる組織が誕生した。

20TH YEARS

1995年
上井草への移転

活動の場を広げるため、長年使用していた練馬区の石神井公園から上井草へと拠点を移転。子どもたちがよりびのびと活動できる環境が整い、プログラムの充実へとつながる転機となった。



2002年
日韓ワールドカップと韓国での学会発表

サッカー界が沸いた日韓ワールドカップの年、澤田氏は幼児体育の可能性をさらに広げるべくアジア幼児体育学会に参加。大学の先生たちとともに韓国を訪れ、幼児体育に関する知見を共有。これが後の国際交流活動の大きなきっかけとなる。

2002年以降
NPO法人アジアキッズスポーツ協会の設立

日韓のスポーツ交流を深めるためにNPO法人アジアキッズスポーツ協会を設立。韓国の子どもたちを日本へ招き、松本・菅平・富士吉田などでスポーツを通じた国際交流を行った。約8年間にわたる継続的な交流の中で、スポーツが生む「言葉を超えたつながり」の重要性を実感する。



40TH YEARS

2015年7月
WSSAジャパンの設立



新しいスポーツ文化の普及に貢献するべく、日本唯一のスポーツスタッキング公認団体「WSSAジャパン」を設立。単なる遊びではなく、瞬発力やリズム感、集中力を養う競技として、全国の子どもたちにその魅力を広める活動をスタートした。



2019年
「ABCプログラム実践テキスト」作成

「幼児体育において、何が本当に大切なのか?」その問いに答えるべく、幼児期の運動指導の基本をまとめた「ABCプログラム実践テキスト」を発行。幼児期の運動が脳の発達にどのような影響を与えるのかを理論的に整理し、指導者向けの実践的なノウハウも盛り込んだ。



2020年
「ABCプログラム実践テキスト 第2版」作成

さらに内容を進化させ、28のプログラム例を追加した第2版を発行。より具体的な指導法を示し、実践的な運動の導入をサポートする形へと発展した。



2020年～
コロナ禍：韓国との交流会の中断

約8年間続けてきた日韓交流だったが、MERSの流行を機に一時中断。その後、コロナ禍による渡航制限も重なり、再開が困難な状況に。しかし、スポーツを通じた国際交流の必要性は変わらず、再開に向けた準備が進められていた。



2025年(予定)
韓国との交流会を再開へ再び、国境を超えたスポーツの輪を広げる



Sport in Life アワード
「奨励賞」受賞

スポーツ庁主催の「Sport in Life アワード」を受賞。さわだスポーツクラブは、スポーツを通じた社会貢献活動が評価され、スポーツ庁主催の「Sport in Life アワード」を受賞。



取締役社長 澤田コメント



HD社長コメントはこちら

私たちは、運動を通して子どもたちの「こころ」と「からだ」の健やかな成長を支えることを大切にしています。しかし、デジタル化や生活習慣の変化により、子どもたちの運動機会は減少しています。幼児期に適切な運動経験を積むことは、心身の成長に欠かせません。そのため、行動(Action)、脳の刺激(Brain)、多様な運動経験(Circuit)を組み合わせたABCプログラムを開発しました。また、すべての子どもが公平に運動を楽しめる環境づくりも重要です。経済格差による機会の違いをなくすため、障がいの有無を問わず楽しめるスポーツスタッキングの普及にも力を入れています。今後は、日本で培ったプログラムをアジア、そして世界へと広げ、すべての子どもが国境を超えて楽しめる運動環境をつくっていきます。

1975年

長嶋茂雄、現役引退

巨人のミスタープロ野球



1982年

西武ライオンズ、日本シリーズ初優勝

黄金時代の幕開け

1985年

阪神タイガース、38年ぶり日本一

バース・掛布・岡田のバックスクリーン3連発

1995年

Jリーグ、観客動員数が初の500万人突破

日本サッカーの人気急拡大



2002年

日韓ワールドカップ開催、日本代表が初の決勝トーナメント進出

ベスト16、トルシエ監督時代

2015年

羽生結弦、フィギュアスケート世界選手権優勝

日本男子初の偉業



2019年

ラグビーワールドカップ日本開催、史上初のベスト8進出

日本代表が歴史的快挙、初のベスト8入り



2020年

東京オリンピックが新型コロナウイルスの影響で延期

パンデミックの影響で史上初の延期



SAWADA S.C.

FEATURE OF
50TH YEARS

— これからの展望 —

幼児体育の専門性

社員の Well-being

社会貢献

国際交流

子どもたちが体を動かすことの楽しさを体験し、運動を通して考える力を養う

01

運動の本質:「できる」ではなく「楽しい」



体育というと、「跳び箱が跳べる」「逆上がりができる」などの成果を求めがちですが、私たちの活動の原点は「身体を動かすことって楽しいよね」と、すべての子どもに感じてもらうことにあります。単なる体力づくりではなく、幼児期からの社会的・知的・情緒的な発達を支える運動プログラムを模索し続けています。

02

幼児期に必要な運動経験



幼児期、特に5~6歳から10歳頃までは、神経系の発達につながる基礎的な運動をたくさん経験することが大切です。例えば、自転車に乗るには、手足をバランスよく使う必要がありますが、幼児期にこうした運動を経験しておくことで、10歳以降で改めて練習しなくてもスムーズにできるようになります。

03

伝承遊びと運動のつながり



「運動と脳」が結びついた遊びは、昔ながらの伝承遊びに多く含まれています。誰でもできる「手遊び」や「鬼ごっこ」には、神経系の発達を促す要素が詰まっています。こうした遊びを取り入れながら、仲間と楽しく運動できる環境をつくることを大切にしています。

04

幼児期の運動指導の工夫



2019年には「ABCプログラム実践テキスト」を作成し、幼児期の運動指導において重要な考え方をまとめました。2020年には28のプログラム例を追加した「第2版」を発行。子どもたちに伝わりやすい言葉かけの工夫や、動画を活用した指導法も取り入れています。

05

運動を通じた連携の可能性



幼児期の運動と学びの関係を深めるために、「運動と脳」「サーキット運動」を組み合わせた独自プログラムを開発しました。学校の先生方や地域のスポーツ指導者と連携し、それぞれの目的を理解しながら補い合う関係を築くことが大切です。運動は幼児教育と小学校教育の連携をスムーズにする分野の一つであり、学校の業間遊びなどに取り入れることで、運動の楽しさを広げていければと考えています。